

## トニー・ベネット

安藤 晃二

「トニー・ベネットさん死去 96 歳、米歌手、7 月 21 日」、読売新聞の見出しに、「おおっ！」と叫び声をあげた。私がカラオケで何十年間も「思い出のサンフランシスコ」を持ち歌 No.1 とキープした事情はそれとして、昔のあるできごと故に、トニー・ベネットと聞けば、ある感動が蘇る。

1969 年 2 月、私はニューヨークへ赴任した。当時の駐在員の生活は、質素なものであり、マンハッタンからリンカーン・トンネルでハドソン川をくぐり上流に向かう川沿いのニュージャージーの町に、安手のガーデンアパートを借りて住み、半年程遅れてやって来た妻と赤ん坊の長男を迎えた。

ユダヤ人の家具屋の采配で会社補助の総予算 250 ドルの新品家具の手配に 1 時間もかからない。加えて自費でテレビも要るし、ステレオもと、街の電気屋へ。200 ドル前後のコンポをオファーされ、「ちょっと音が荒いね」と文句をつけたものだ。試聴盤は、今を時めくトニー・ベネット。イタリア人の店主は急に真顔になって、「ミスター、This is Tony Bennett, you know」トニーの husky voice を解って下さい、サウンドの再生は完璧だから間違いない、と懇願する。この際亭主に担がれてみようか、あっさり決断してそのコンポを購入した。オーディオの品質は先ず先ず、その後 10 年間我が家と共に世界を旅した。しかし、あろう事か、そのターンテーブルには一枚としてクラシック以外のレコード盤が載せられた事はなかった。思えばあの時、何故モーツァルトを試聴しなかったのか。あのバツ屋街と見まがうニュージャージーの店頭の雰囲気、トニー・ベネットを救世主に売り込む店主に天の配剤が味方し、そのマジックに、私は完敗したのであった。

ロイターの訃報に曰く、「自身に満ちた愛想の良い、アメリカの歌手、そのクールさ故に 21 世紀の若物までファンとして魅了、2015 年、八十半ばで、あのレディガガとデュエットをヒットさせ、翌年に世界公演旅行を実現した。シナトラに勝るとも劣らない、アメリカのレジェンドそのものである」 (2023 年 7 月 27 日)